

Community & Friend

2026 年 9 月号

有限会社アルファ
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は <https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm>

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 9 月号をお送り致しました。



早いもので、今年も、もう9月号を書いている。ここでは『もう』と書いたが、これを読んで頂いている皆さんなかには、『まだ』と思う人がいるかもしれない。『もう』とも『まだ』とも思うのが、『時』というものの性格なのか。地球が一回転して一日。それを 24 分割して 1 時間。逆に地球が太陽の周りを公転して元の位置に戻るのに要した時間を 1 年と決めている。つまり同じ『時』の量なのに、『もう』と『まだ』に『感覚』が分かれる。人で分かれるというより、自分自身でも『もう』と『まだ』に分かれる。これは如何した事かと考えると、どうも時間というのは『絶対的』と思えるが、それは先のように単位として区切った場合に限るようで、実際には『相対的』となるようだ。つまり、『もう』と『まだ』は、どちらも正確ということになる。言い換えればそれは『事実』だという事になる。基準となる時間単位に対して、自分が『密』なる時間を過ごしたか、『疎』となる時間を過ごしたかに由って、時間は相対的に長くなったり短くなったりする性格を持っている事になる。人時生産性が 100 だとして。めっちゃ頑張って、倍の『密』を実現すると、200になる。つまり100を基準とすると、2 時間分の仕事をして 1 時間である。

『あれっ、200 やったのに未だ 1 時間しかたっていないの？』って、間に『未だ』が入る。基準は、人時生産性 100。つまり、基準が無いと、この世の中のすべての物事は時間の計測は不可能という事になる。飛行機で高度高く、しかも速く飛んでいる時間は、地上で過ごす時間より、当然時間経過のスピードが遅い。もし、若く、いたければ、飛行機で上空を飛ぶ期間を長くすれば、地上に降り立った時、自分は地上で暮らす人より相対的に若くられる事になる。『インターステラ』という映画を観れば、この辺の事が極端に描かれている。『何が言いたいのかサッパリわからん』と言われるそうだが、言いたい事はいつもの様に物理学の進歩は著しく、ますますミクロの世界を解明しつつあり、その解明が『個別の感覚でしょう』という事象を解き明かす。そしてそれをビジネスに活用できる。

今まで、抽象はマクロの世界の事で、具象はミクロの世界の事だと思っていた。何が micro で何が macro かを定義しないとイケないが、だけど、実は逆なのだと思い始めた。画像の楽しそうな人物は、『野村泰紀』という学者で、丁度3年前に彼の事を書いた記憶がある。彼の講義では、今から 100 年ほど前には『もう物理学は行き着いた』と言われた時代があったそう。特殊・一般相対性両理論の登場によって、すべての物理現象が解き明かされたと思ったその次の瞬間（実は感じていたより早く）量子の発見が為されたそう。私自身が『量子力学』なる存在に気づいたのは、ちょうど今の会社の仕事を『信念』と『志し』を以て始めた頃になる。顧客が急に増える現象になり、商品開発の必要性が急増した為、新しい人間関係を形成した時期にある。覚えているのは、それで北海道の産地を、知り合ったばかりの『札幌まほろば』大橋社長の随行でまわっていた時の会話で、これを話題にしていたので覚えている。

その出来事は、今から10年ほど前になる。なので量子力学は最近の出来事だと錯覚していた。量子概念以前を引きずると『光は波であり、粒子である』というらしいが、この定義すら不十分な気がして、実際には『波でも粒子でもなく、量子である』が正しいような気がする。それ以前は直線的な気がする。波か粒子ではなく、それは『観測』した瞬間に粒子の性格を帯び、『観測』しなければ波の性格になる。これは光子の二重スリット通過実験なるもので現象として明らかになっていて、誰しも一瞬理解に苦しむらしい。私には何ら不思議な事ではなく、この現象は今までの科学・物理学の捉え方を常識と思わなければ良いだけ。この『観測』が『意識』なるがそれは来月に。

物理学とは、物の理(ことわり)を明らかにする問いに、出来る限り答えを見出すこと。ただ科学という限り、個別に問う事ではなく、誰が問いを出しても同じ応答が出来、従って客観性を持つという事になるが、この客観性という曲者に焦点が当たったのが、『観測』であり、『観測』した瞬間に波から粒子に性格が変わり、この現象を科学的に認める。これを量子論としてスタートする。また、波か粒か、に分ける事は、性格上は出来ても、その存在位置は必ずしもミクロの世界では、定点とはならない。定点とはならないとは、『分布』という存在になるという事。定点とならないのであれば、物理学法則によってミサイルは照準通り着弾したり、相応のコストを掛けて木星探査機を飛ばしても、実成るリターンを得られないという事になるが、実際にはイラン首脳陣は消されたし、木星探査機は極軌道を周回し観測結果を地球にもたらしている。

どういう事かという、これが書き出しのミクロとマクロという事になり、マクロの中でもミクロの現象は多数発生しているが、互いにキャンセルし合い、ほとんど影響を及ぼさないという事らしい。分からぬでもない。実生活と、学問上の機微とは違うが、だけどその私たちが理解できる範囲の携帯電話の通信とか、少々乱れても分布の範囲であれば実用に差し支えなく、十分に工学的に利用できる論理で、これが目に見えない、実態を感じ辛い中で、文明の機器として機能している。

さて、先に書いたように今月のテーマは『人時生産性』の高まりである。人時生産性の高まりの焦点は儲かるか儲からないかに繋がっている。いつだったか信じていることが出来る者だけが儲けられると書いた。この信じて、信じない、におそらく『量子力学』は働いている。おそらく書いたのは、私の物理学に対する敬意に過ぎない。

人時生産性が倍になって儲かる数字は、コストに占める100出来る時給分割合に過ぎない。利益効率の低い食品業界では当然低い。では、食品業界に於いて儲かるとは、固定費に対して売上額が高くなることだが、実際には粗利額が高くなると営業利益は高くなる。では固定費に対して粗利額が高くなることは、単品粗利額×販売点数の積で決まる。食品業界は商品の種類が多いので、この積を量子の考え方の『分布』と同じように捉えてみれば、分かりやすくなる。ポイントは自社内の分布と社会全体の分布を比べると、取り入れるべき分布が何処にあるのかが分かる。

では、その対象顧客自体は何処に分布しているのか。社会全体の分布は観察に過ぎなくて、観察結果が即自社で実行出来るとは限らない。地動説からニュートン力学までに100年の歴史がある。そこから200年ほどで相対性理論が出て来て、更に100年経過しているのが今である。スーパーマーケットの根幹を為すチェーンストア理論なるものは、既に60年ほど経過している。

重量も無く、従って眼に見えないし、匂いも無い物理で、この世界は出来ていると私が気づいて50年になる。気づく以前に『量子』は物理学者によって納得を受け、この100年ほどで体系づけられて来た。この視点で先の対象顧客分布を眺めてみれば、その概念を理解出来、概要を取り込むことが出来れば、時間の相対性を克服する事が論理的に可能となる。米国在住コンサルタントに教えられたOODA通り、観察が出来、論理を分析でき、仮説を立てる事が出来れば、後は実行すれば良いだけと思える。

有限会社アルファー 吉田清一郎